

第133号  
2022.2 発行

# 総研大 NEWSLETTER



## トピックス

---

- ◆ 学長・年頭のご挨拶
  - ◆ 高エネルギー加速器科学研究科 2021 スチューデントデイ開催
  - ◆ 日本文学研究専攻 中間報告論文研究発表会をオンラインで開催
  - ◆ 総研大文化フォーラム 2021 をオンライン開催
  - ◆ 学術情報基盤事務室 図書係 2021 年度 附属図書館職員研修会
  - ◆ 教育開発センター（CED）セミナー開催
  - ◆ 先端学術院（仮称）特設サイト及びアンケートについて
- 

## 受賞情報

---

## プレスリリース情報

---

## 研究助成学生の研究紹介

---

## メディア等出演・掲載情報

---

## イベント情報

---

## お知らせ

---



みなさま、明けましておめでとうございます。昨年もういろいろとご苦労様でした。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

2019年の末ごろから始まった新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、もう2年も続き、なかなかきれいに片付きません。次々と新しいウイルスの株が出てきますが、これは、今後も続くでしょう。何らかの有効な治療薬が出てくるまで、安心はできません。そこで、コロナがあっても何とか通常に仕事を続けられるようにと、オンライン会議などの利用が進展しました。これはこれでよかった事だとは思いますが、やはり、対面で話し、みんなで場を共有しながら仕事をするのとは、違います。それによって失われているものは、実はかなり多いのではないかと私は危惧しています。

院生のみなさんも、実験や野外観察などの現場に出なければいけない人にとっては、特に大変にやりにくい状況ではないでしょうか。理論や計算だけで

も大丈夫という人たちにとっても、みんなで集まってワイワイとディスカッションできないとなると、発想も豊かではなくなるでしょう。そんな中で、何とか論文を仕上げねばならないと考えると、とても焦りが募ると思います。指導教員の先生方と相談しながら、なるべく良い方法を探って研究を続けてください。

感染症のこと、気候変動のこと、世界の政治情勢のこと、経済のこと、世の中には問題が山積みです。これからの世界をどうしていくのが良いのか、そのために何をせねばならないのか、一人一人がよく考える事は大事です。でも、一人の力ではなかなか変革はできません。しかし、一人一人がその気にならなければ変革できないのも事実です。難しい問題ですが、みんなで考え続けていきましょう。

今年トラ年。トラはアジアに住む大型の食肉目の動物です。いくつもの亜種に分かれています。そのほとんどが絶滅危惧種となっています。野生では、もう数百頭しかいないと推定されているものもいます。トラ年の今年、トラたちの絶滅リスクが少しでも減る方向に世の中が変わればと願っていますが、私たち人類の行方にも、暗雲が立ち込めることのないよう、みんなで新風を巻き起こしていきましょう。

総合研究大学院大学  
長谷川 眞理子

<https://www.soken.ac.jp/news/7217/>

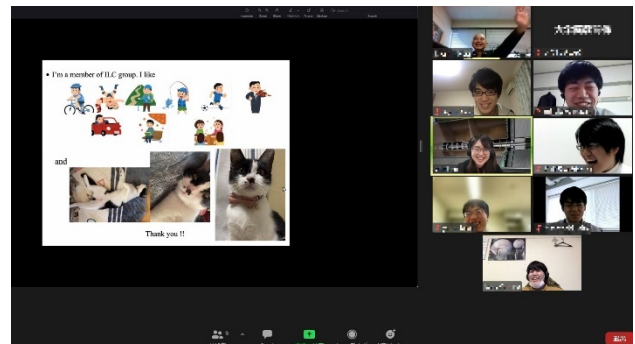




## 高エネルギー加速器科学研究所 2021 スチューデントデイ開催

11月15日（月）高エネルギー加速器研究機構（KEK）で、第8回「KEK スチューデントデイ」が開催されました。今年も前年に引き続き、新型コロナウイルス感染症防止のため、オンラインでの開催となりました。前年、同イベントを行った際に出てきた反省点を生かし、今年度は、全体講演の内容を変更したり、スムーズに進行できるようグループセッションの議長を学生の中からあらかじめ決めておいたりなど、修正を行い開催する運びとなりました。スチューデントデイには、総研大に所属する学生や教員、連携大学院生、特別共同利用研究員等計約100名が参加し、交流を深めました。

プログラムは第1部と第2部に分かれており、第1部では、在学生へのアカデミックキャリアパス支援の一環として、総研大の修了生で現在、京都大学助教やKEK助教、博士研究員として活躍する計4名の方々に15分ずつの講演を行っていただきました。講演は英語で行われ、自身の研究や研究者になるために在学時代行っていたこと、コロナ禍での論文執筆経験と赤ちゃんとの研究生生活、海外での研究者としての生活の様子などを、ユーモアを交えて紹介いただきました。普段の講演会ではなかなか聞くことができない年齢の近い講演者のお話ということもあり、参加者はよりリアルに自身の将来のキャリアのために、今何をすべきかを考える良い機会となり、大満足の様子でした。



Student Day オンラインの様子

第2部では、素粒子、物質構造、加速器の3分野ごとに総研大生、連携大学院生、特別共同利用研究員の混成グループを形成し、自己紹介、自身の研究内容の紹介について各自10分程度でプレゼンを行いました。昨年以来の大規模な学生同士の交流の機会ということもあり、参加者はいきいきと自分の趣味や研究について紹介し、それに対して質問が飛び交うなど有意義な時間となりました。

今後も、スチューデントデイや大学院説明会など様々な研究科のイベントがオンラインで開催されることが予想されます。コロナ禍で貴重な学生同士の交流の機会を提供するため、また説明会に参加した学生に少しでも研究科に興味を持ってもらえるために、今までの経験をいかし、より良いイベントにしていけるようさらなる工夫と、前例にとらわれない柔軟な対応が求められます。

【高エネルギー加速器研究機構】



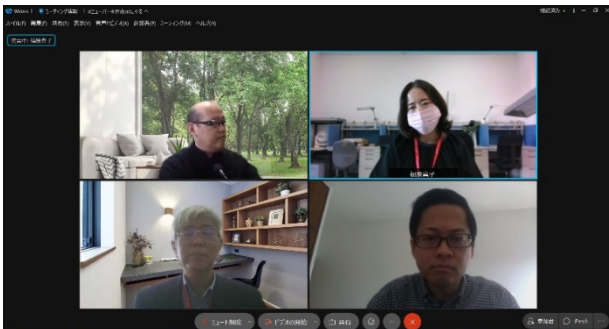
## 日本文学研究専攻 中間報告論文研究発表会をオンラインで開催

11月26日（金）、日本文学研究専攻では2021年度中間報告論文研究発表会をオンラインで開催しました。当発表会は博士論文作成指導のステップの一つで、学生が研究成果や調査の進捗状況を報告し、質問に答え、教員から指導を受けることで課題を整理し、研究の方向性を考える機会となっています。

今年度は在学生の福原真子さん、石井行雄さん、伊藤美幸さん、高須賀萌さんの合計4名が発表を行いました。発表者のうち、今年度入学した福原真子さんは、社会人として専門学校や企業で書道やペン字を教えるなかで感じた、「書」を文学との関係や実用性などを含めた日本文化のなかでの一要素とし

て考えてみたいという思いから研究を続けています。

今回の発表では『定家卿筆道』と呼ばれる藤原定家の特徴的な文字造形を記すための書法について書かれた一連の写本に着目し、伝本間の差異を調査。



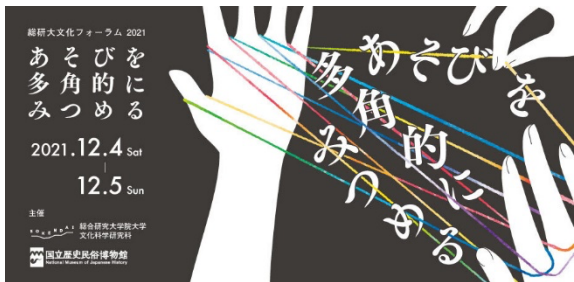
教員からの質問に答える福原さん（右上）

先行研究では十分に行われていなかった書写内容の吟味や伝本系統の検討、さらに書学の観点からの内容の明確化など、今後の研究計画を発表しました。福原さんにとっては、今回が専攻での初めての発表の場でしたが、日頃から学生が自発的にオンラインでの研究会を開催して、発表や交流の場を設けており、また、学会でのオンライン発表の機会も増えていることから、落ち着いて発表する姿が見られました。

参加した学生は、教員から寄せられた質問や意見に耳を傾けながら、研究の課題や今後の研究の進め方を確認している様子でした。学生は今回の研究指導を生かし、2月の中間報告論文の提出に向けて準備を進めます。 【日本文学専攻】



## 総研大文化フォーラム 2021 をオンライン開催



文化科学研究科では、12月4日（土）・5日（日）の2日間、日本歴史研究専攻がホストとなり総研大文化フォーラム 2021 を開催しました。総研大文化フォーラムは総研大唯一の文系研究科である文化科学研究科が主催する学術講演会で、「文化」を切り口として、さまざまな専門分野を持つ学内外の教員と学生の学術的な交流の機会を提供しています。会場・オンライン併用のハイブリッド開催であった前回に続き、今回は完全オンライン開催とし、関東（国立歴史民俗博物館）・関西（国立民族学博物館）の2拠点で運営されました。

基調講演（4日）には、国立歴史民俗博物館名誉教授 横山百合子先生を迎え、「芸能から性の搾取まで—『遊女』の歴史をふりかえる—」と題し、社会の中での性の売買がどう行われ、扱われてきた

か、絵巻物や遊女の日記などの史料をみながら語っていただきました。研究発表（4日）では3件の発表があり、専門分野をまたいで議論がありました。

シンポジウム（5日）では、分野の異なる4名のパネリストを中心に「闘争」「研究活動」「よそおい」「まなび」という様々な視点から「あそび」について話題提供があり、多様な目線から「あそび」に関する活発な議論が交わされました。

オンラインならではの企画「文化科学研究紹介リレー」では、学生・教員が自らの研究内容の魅力を語り、その後の懇親会でも話題になるなど、専攻をまたいだ交流のきっかけとなりました。

特別企画「収蔵資料で遊んでみた！」では学生企画委員が歴博の収蔵資料（のコピー）で遊んでみたり、民博の特別展を体験したりする映像が放映され、普段の研究会等では見られない、学生の「遊び」の面が垣間見えました。

昨年のオンライン・会場ハイブリッド開催での知見を活かしつつ、会場の制約を受けないオンライン開催の特性を利用した企画を考案するなど、企画委員の学生の創意工夫が随所に見られ、フォーラムの新たな姿を感じる機会となりました。

【学務支援係】

12/10

## 2021年度 附属図書館職員研修会

12月10日（金）13時30分から16時55分までコロナ禍の状況の中、昨年に引き続き Webex オンライン形式で、2021年度附属図書館職員研修会が開催されました。今年度は、附属図書館を構成する各基盤機関の図書館・図書室の担当教職員33名の参加がありました。

研修会では、貝塚室長の司会進行のもと、研修会に先立ち、渡辺附属図書館長から開会の挨拶をいただき、引き続き意見交換会が行われました。各基盤機関の図書館・図書室から Springer の契約・費用、Wiley 電子ジャーナルの契約・費用、Science Direct トランザクションの清算や Pay Per View、さらには全学契約についてなどが、予め提出されており、それらの課題について葉山図書係及び柳生副館長より回答されるなど、活発な意見交換が行われました。

承合事項としては、自館で契約している電子ジャーナルの契約、図書費（予算）、各基盤機関の図書館・図書室で価格高騰への対策についての課題などが予め提出されており、各基盤機関の対策状況等の報告が行われ、大変有意義な情報交換の場となりました。

また、外部講師をお招きして、講演会が開かれました。講師は、名古屋大学 情報連携推進本部 情報戦略室 青木学聡教授で、「大学における研究データ管理の体制と具体方策」ーポリシーをどう具現化・実施するかーと題して、大学における研究データ管理について、大学による組織的 RDM の振り返り、大学に携わる研究者から見た RDM、さらには、大学図書館が RDM とどのような関係にあり、

今後、RDM はどう発展していくのかという講義をしていただきました。

下記に講演資料の提示させていただきます。ご興味のある方はぜひとも一読ください。



名古屋大学  
情報連携推進本部 情報戦略室  
青木 学聡 教授

参考) 本学リポジトリ掲載「大学における研究データ管理の体制と具体方策」ーポリシーをどう具現化・実施するかー

### ■講演資料

<http://id.nii.ac.jp/1013/00006159/>



昨年度に続き、今年度もオンライン開催となりましたが、各基盤機関の図書館・図書室と意見を交わし、それぞれの課題や図書館への取り組みなどの現状を知ることができ、大変意義のある研修会となりました。今後もさらに、研究者・学生によりよい支援を提供できるようにしていきたいと思っております。

ご参加の皆様、ありがとうございました。

【学術情報基盤事務室 図書係】

12/20  
1/17

## 教育開発センター（CED）セミナー開催

教育開発センター（CED）では、主に在学生対象の CED セミナーを昨年度より開催しています。今年度は全6回全てをオンライン配信とし、先日までに第2回目が終了しました。12月20日に開催された最初のセミナーは、シンガポールにある Nanyang Technological University の Hie Lim Kim 助教による「Academic Career Seminar」でした。博士号取

得後に海外でのアカデミックポストを考えている在学生の方を主な対象として、英語で開催しました。Kim さんは、本学先導科学研究科を修了後、米国の Pennsylvania State University とシンガポールの Nanyang Technological University でのポストドクを経て現職に着任されており、国を跨いだキャリア形成にあたって在学中に意識して身につけた能力な

ど、総研大生への具体的なアドバイスをいただきました。



当日の zoom によるセミナーの様子

また、ワークライフバランスの観点から、海外で子育てをしながら研究と両立させる工夫など、後輩へのメッセージも語っていただきました。当日は様々な専攻から全 13 名の参加がありました。

続いて 1 月 17 日には、東京大学大学院教育学研究科の栗田佳代子教授による、「これからの大学教育・大学教員」を開催しました。栗田先生は東京大学にて、大学教員を目指す大学院生向けの全学授業「東京大学フューチャーファカルティプログラム」を実施されており、プレ FD 教育（大学教員として教育力向上を目的とした大学院生向け教育）のプロフェッショナルとして活躍されている方です。今回は総研大初のプレ FD セミナーとして、大学教育の

現状やアクティブラーニングの活用について、グループワーク体験も交えながらお話いただきました。様々な専攻の学生・教員の方あわせて 18 名が参加しました。

今後は、2 月 18 日（金）に、東北大学の山内保典准教授による「社会のあらゆる現場で活用できるスキルとは？～自らのトランスファラブル・スキルの再発見」、3 月 9 日（水）に、東京工業大学の大上雅史助教による「学振申請書の書き方講座」、3 月 18 日（金）に、株式会社 POL の田中育氏による「博士のキャリアセミナー：スカウト型就職支援サービスの活用」、3 月 23 日（水）・25 日（金）に、教育開発センターの Jeremiah Sechrist 講師による、「研究者のビジネス英語」を開催予定です。本学ウェブサイトから順次参加申し込みが可能となりますので、奮ってご参加下さい。

【教育開発センター】

#### ■CED セミナー 2021

[https://www.soken.ac.jp/outline/education/ced\\_seminar/](https://www.soken.ac.jp/outline/education/ced_seminar/)



## 先端学術院（仮称）特設サイト及びアンケートについて

本学は 2023 年 4 月より、先端学術院（仮称）へ移行することを検討しています。そのことに伴い、2021 年 9 月に特設サイトをオープンしました。

また、先端学術院（仮称）構想を推進していくにあたり、皆さまの声を伺うため、11 月 25 日に、先端学術院（仮称）特設サイトに、アンケートページを開設しました。

多くの方々からのご回答をお待ちしております。

<https://next20.soken.ac.jp/voice>



【広報社会連携係】

(アンケート募集チラシ)

# Awards

## ■ 機能分子科学専攻 大森賢治教授 紫綬褒章を受章（量子物理学研究功績）

物理科学研究科 機能分子科学専攻（分子科学研究所）の大森賢治教授に、天皇陛下より令和3年秋の紫綬褒章が授与されることが決定されました。紫綬褒章は科学技術分野における発明・発見や、学術及びスポーツ・芸術文化分野における優れた業績を挙げた方に授与されます。

### 【受賞コメント】

伝統と栄誉ある章を賜り光栄に存じます。これまで私をご指導くださった先生方、そして大森グループの助教、技術職員、博士研究員、学生、秘書を始

め共に研究に邁進した仲間たちに心より感謝します。今回の受章を励みに、今後も引き続き、量子の不思議な世界をより良く理解するための基礎研究を追求していきます。そして、より良い理解を活かした量子シミュレータ・量子コンピュータの開発に邁進します。

<https://www.soken.ac.jp/news/7166/>



<https://www.ims.ac.jp/news/2021/11/1102.html>



## ■ 分子科学研究所 川合眞紀所長 日本学士院会員に選定

日本学士院は、12月13日（月）に開催された総会において、日本学士院法に基づき、川合眞紀所長、および他4名を新たに日本学士院会員として選定しました。

[https://www.ims.ac.jp/news/2021/12/post\\_359.html](https://www.ims.ac.jp/news/2021/12/post_359.html)



## ■ 宇宙科学専攻 杉本良介さん 日本物理学会 学生優秀発表賞 受賞



9月14日（火）宇宙科学専攻杉本良介さん（D4）が、2021年秋季大会 日本物理学会学生優秀発表賞を受賞しました。

### 【受賞コメント】

今回の受賞は back-link 干渉計という将来の宇宙重力波検出器において根幹となり得る部分の実証実験に関するもので、ひとえに皆様のサポートのおかげです。

今後は back-link 干渉計の地上での機能実証を目指すと共に最終的には初期宇宙からの原始背景重力波直接検出に向けた目処を立てられればと思います。

### 【対象発表】

宇宙重力波望遠鏡における周波数安定化に向けた back-linked Fabry-Perot 干渉計の開発III

[https://www.jps.or.jp/activities/awards/gakusei/2021\\_student\\_presentation\\_award.php](https://www.jps.or.jp/activities/awards/gakusei/2021_student_presentation_award.php)



## ■ 地域文化学専攻 川瀬慈准教授 第43回 サントリー学芸賞受賞

11月11日(木)、地域文化学専攻(国立民族学博物館人類基礎理論研究部)の川瀬慈准教授が第43回 サントリー学芸賞を受賞しました。

公益財団法人サントリー文化財団(理事長 鳥井信吾)は、毎年、前年1月以降に出版された著作物を対象に選考し、広く社会と文化を考える、独創的で優れた研究、評論活動をされた方を顕彰しています。

### 【受賞対象】

『エチオピア高原の吟遊詩人ーうたに生きる者たち』(音楽之友社)

<https://www.suntory.co.jp/news/article/14024-1.html>



## ■ 遺伝学専攻 細木拓也さん 日本生態学会中部地区大会 研究発表賞受賞

遺伝学専攻の細木拓也さん(DC2・生態遺伝学研究室)が、11月20日(土)にオンラインで開催された日本生態学会中部地区大会にて、研究発表賞を受賞しました。

総研大の博士課程で実施している大槌の新規イトヨ集団に関する研究成果について発表しました。

### 【受賞対象】

『2011年東北震災後に出現したトゲウオ雑種集団における再種分化』

[https://www.nig.ac.jp/nig/ja/2021/11/information\\_ja/ha20211126.html](https://www.nig.ac.jp/nig/ja/2021/11/information_ja/ha20211126.html)



## ■ 核融合科学専攻 小川国大准教授、磯部光孝教授、長壁正樹教授 プラズマ・核融合学会 第29回論文賞 受賞

11月25日(木)核融合科学専攻 小川国大准教授、磯部光孝教授、長壁正樹教授が、プラズマ・核融合学会第29回 論文賞を受賞しました。

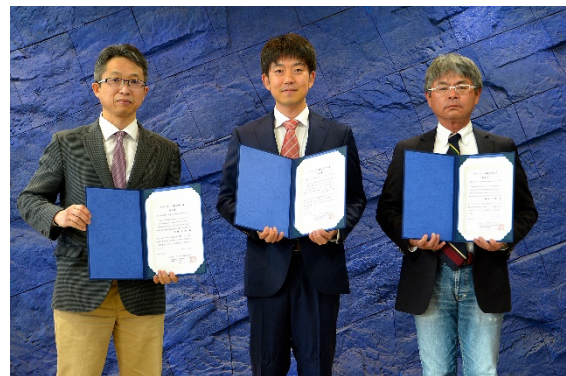
### 【対象発表】

Progress on Integrated Neutron Diagnostics for Deuterium Plasma Experiments and Energetic Particle Confinement Studies in the Large Helical Device During the Campaigns from FY2017 to FY2019

### 【受賞コメント】

本受賞は、大型ヘリカル装置(LHD)における重水素実験の開始に伴い、環状磁場閉じ込めプラズマ実験装置に共通した高エネルギー粒子閉じ込めに係る研究を大きく進展させたことが認められたもので、国内外の共同研究者の皆様のご支援の賜物と心より

感謝しております。本受賞を励みに、引き続き、環状プラズマにおける高エネルギー粒子閉じ込めの包括的理解に向けて、高エネルギー粒子挙動の解明研究に力を尽くす所存です。



左:長壁正樹教授、中央:小川国大准教授、右:磯部光孝教授

<http://www.jspf.or.jp/award2/work.html>





■ 核融合科学専攻 修了生 小淵隆さん、小川国大准教授、磯部光孝教授  
プラズマ・核融合学会 第20回産業技術賞 受賞

11月25日(木)核融合科学専攻の修了生・小淵隆さん、小川国大准教授、磯部光孝教授が、プラズマ・核融合学会第20回産業技術賞を受賞しました。

【対象発表】

高速時間応答性を持つ核融合実験向け広領域中性子計測機器の開発

【受賞コメント】

高速時間応答性を持つ広領域中性子計測システムは、大型ヘリカル装置(LHD)での重水素実験において中性子発生率や発生量の測定、管理を行うために研究開発したシステムです。開発には約6年を費やしました。その間、東芝エネルギーシステムズ株式会社の皆様と議論を重ね、開発を進めてきました。

また、システムの基幹部であるデジタル信号処理ユニットのプロトタイプ動作試験では京都大学複合原子力科学研究所の皆様の多大なご協力を得て有意義なデータを取得することができ、お陰をもちまして、極めて安定した信頼度の高い実機の製作につなげることができました。この場を借りて感謝申し上げます。また、核融合科学専攻にて博士学位を取得した後、これまでエンジニアリングの面から核融合科学の発展に貢献して参りました。この度は、名誉ある賞をいただき、大変嬉しく、また光栄に存じます。

<http://www.jspf.or.jp/award2/work.html>



■ 生命共生体進化学専攻 坂本貴洋さん 日本遺伝学会 第93回大会 BP 賞受賞

11月29日(月)生命共生体進化学専攻の坂本貴洋さん(D4)が、日本遺伝学会第93回大会BP賞を受賞しました。

【対象発表】

性拮抗選択によって駆動される性決定遺伝子座の遷移

【受賞コメント】

性決定遺伝子に移り変わる際の進化ダイナミクスについて、数学的な解析とシミュレーションによっ

て得られた結果を発表し、口頭発表賞をいただきました。指導教員の印南先生をはじめとする研究室の皆様のサポートに感謝しています。今後も面白い研究と分かりやすいプレゼンを心がけたいです。

<https://gsj3.org/newslist/2021/news1506>



■ 機能分子科学専攻 伊澤誠一郎助教 エヌエフ基金研究開発奨励賞優秀賞受賞

物質分子科学研究領域の伊澤誠一郎助教が「有機半導体界面での新原理フォトンアップコンバージョン」の業績で2021年度エヌエフ基金研究開発奨励賞優秀賞を受賞しました。本賞は科学、技術の進歩、発展に貢献し、健全な社会と人類の更なる幸福

に寄与する若手研究者に対してエヌエフ基金より授与されます。

<https://www.ims.ac.jp/news/2021/12/1203.html>



■ 構造分子科学専攻 瀬川泰知准教授 Chemist Award BCA 2021 受賞

生命・錯体分子科学研究領域の瀬川泰知准教授が「湾曲した芳香族炭化水素の合成と性質解明」の業績でChemist Award BCA 2021を受賞しました。本賞は有機合成化学分野において優れた業績をあげ今

後の発展が期待される若手研究者に対してMSD生命科学財団より授与されます。

<https://www.ims.ac.jp/news/2021/12/1206.html>



## ■ 日本歴史研究専攻 後藤真准教授 ナイスステップな研究者 2021 に選出

12月14日(火)「科学技術への顕著な貢献2021(ナイスステップな研究者)」に後藤真准教授(日本歴史研究専攻)が選定されました。

科学技術・学術政策研究所(NISTEP)は、科学技術イノベーションの様々な分野において活躍され、日本に元気を与えてくれる方々を「ナイスステップな研究者」として選定しています。

### 【受賞対象】

人文学の研究を可視化し未来につなぐデジタル・ヒューマニティーズの開拓

<https://www.soken.ac.jp/news/7209/>

<https://www.nistep.go.jp/archives/49706>



## ■ 遺伝学専攻 山崎曜助教 第10回日本生態学会奨励賞(鈴木賞)受賞

12月20(月)遺伝学専攻の山崎曜助教が、第10回日本生態学会奨励賞(鈴木賞)を受賞しました。鈴木賞は、学位取得後4年くらいまでの今後の優れた研究展開が期待できる若手研究者に授与される賞です。

### 【受賞対象】

魚類における適応進化と種分化の再現性

[https://www.nig.ac.jp/nig/ja/2021/12/information\\_ja/ha20211220.html](https://www.nig.ac.jp/nig/ja/2021/12/information_ja/ha20211220.html)



## ■ 遺伝学専攻 南克彦さん 2021年度生命科学リトリート受賞

遺伝学専攻南克彦さん(D4・(ゲノムダイナミクス研究室))が12月22日(水)-23日(木)に開催された2021年度総研大生命科学リトリートで発表をおこない、ベスト・ポスター賞を受賞しました。

### 【受賞ポスタータイトル】

Single nucleosome imaging through endogenously labeled replication-dependent histone H3

[https://www.nig.ac.jp/nig/ja/2022/01/information\\_ja/ha20220120.html](https://www.nig.ac.jp/nig/ja/2022/01/information_ja/ha20220120.html)



## ■ 構造分子科学専攻 瀬川泰知准教授 Thieme Chemistry Journals Award 2022 受賞

生命・錯体分子科学研究領域の瀬川泰知准教授がThieme Chemistry Journals Award 2022を受賞しました。本賞は、化学分野の査読付き学術誌を発行しているThieme Chemistryの編集委員会より、化学

合成、触媒、および有機化学関連分野で活躍する気鋭の若手研究者に対して授与されます。

<https://www.ims.ac.jp/news/2022/01/0105.html>

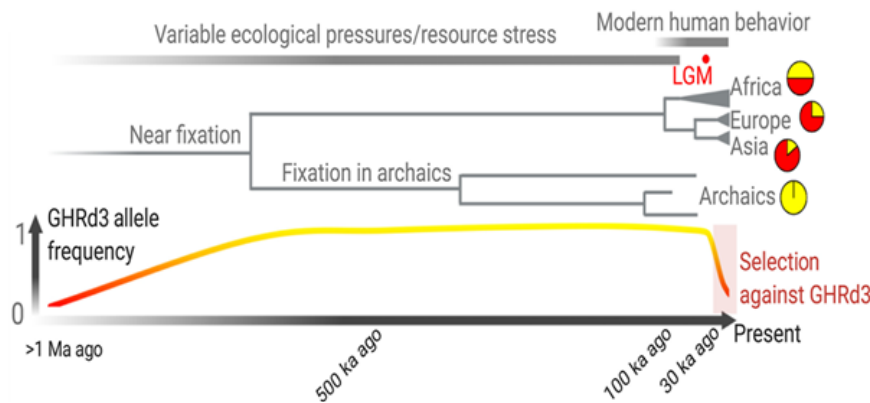


# Press Release

2021.12.23

## 「ネアンデルタール型」ヒト成長ホルモン受容体は、先史時代の食糧が少ない状況下で有利にはたっていたかもしれない

齊藤真理恵<sup>1</sup>, Skyler Resendez<sup>1</sup>, Apoorva J. Pradhan<sup>1</sup>, Fuguo Wu<sup>1</sup>, Natash C. Lie<sup>2</sup>, Nancy J. Hall<sup>2</sup>, Qihui Zhu<sup>3</sup>, Laura Reinhold<sup>3</sup>, 颯田葉子<sup>4</sup>, Leo Speidel<sup>5,6</sup>, 中込滋樹<sup>7</sup>, Neil Hanchard<sup>8</sup>, Gary Churchill<sup>3</sup>, Charles Lee<sup>3,9</sup>, G. Ekin Atilla-Gokcumen<sup>1</sup>, Xiuqian Mu<sup>1</sup>, Omer Gokcumen<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>University at Buffalo, <sup>2</sup>Baylor College of Medicine, <sup>3</sup>The Jackson Laboratory, <sup>4</sup>総合研究大学院大学, <sup>5</sup>University College London, <sup>6</sup>The Francis Crick Institute, <sup>7</sup>Trinity College Dublin, <sup>8</sup>Baylor College of Medicine, <sup>9</sup>The First Affiliated Hospital of Xi'an Jiaotong University



Saitou et al. 2012 Science Advances Vol. 7 No. 39 より改変

図説：Africa, Europe, Asia, 旧人の右横の円グラフは GHR3 (赤) と GHRd3 (黄) のそれぞれの集団 (古代人・現代人) での頻度を表している。下のグラフは 3 万年より以前に絶滅した古代人と同様に我々の集団での GHRd3 の頻度が高かったの比べ、現代人 (アフリカ、ヨーロッパ、アジア) では GHRd3 の頻度が減少したことを表している。  
LGM: 最終氷期。Ma ago: 100 万年前, ka ago: 千年前

### 【研究概要】

ヒトの遺伝的多型※1 は、食糧や気温など環境との相互作用の影響を受けているものがある。今回我々が解析した成長ホルモン受容体遺伝子※2 の多型も、そのような相互作用の影響を受けている。今回注目した変異は成長ホルモンレセプター遺伝子の一部 (第3エクソン) が欠失した GHRd3 遺伝子である。80 万年ほど前に私たちの系統と分岐したネアンデルタール人やデニソワ人も、この GHRd3 遺伝子を持っており、ネアンデルタール人やデニソワ人と私たちの祖先で、この変異型の頻度は高かったことがわかる。

しかし、この GHRd3 の人類集団での頻度は、集団により 10~80% と大きな違いがある。本研究では、今からおよそ 3 万年前から、欠失型ではない成長ホルモンレセプター遺伝子 (GHR) に自然選択が働き始めたことにより、集団ごとの頻度が異なった可能性を示した。さらに、マウスを用いた実験では GHRd3 を持つオスでは低カロリー食を与えられた時、体が小さくなり、エネルギーの消費を抑えて

いることを見出した。おそらく、この GHRd3 は現生人類の祖先が暮らしていた飢餓状態が多い環境では子孫を残すために有利に働いたが、3 万年ほど前から環境が変化し GHRd3 の有利性が失われ、現在では、集団ごとに大きな頻度差が生じているものと思われる。

### 【論文情報】

- 掲載誌：Science Advances Vol 7, No. 39
- 論文タイトル：Sex-specific phenotypic effects and evolutionary history of an ancient polymorphic deletion of the human growth hormone receptor
- 著者：齊藤真理恵 (アメリカ・University at Buffalo・Department of Biological Sciences), Skyler Resendez (アメリカ・University at Buffalo・Department of Biological Sciences), Apoorva J. Pradhan (アメリカ・University at Buffalo・Department of Chemistry), Fuguo Wu

(アメリカ・University at Buffalo・Jacobs School of Medicine and Biological Sciences), Natash C. Lie (アメリカ・Baylor College of Medicine・Department of Molecular and Human Genetics), Nancy J. Hall (アメリカ・Baylor College of Medicine・Department of Molecular and Human Genetics), Qihui Zhu (アメリカ・The Jackson Laboratory for Genomic Medicine), Laura Reinhold (アメリカ・The Jackson Laboratory), 颯田葉子 (総合研究大学院大学・先端科学研究科), Leo Speidel (イギリス・University College London・Genetics Institute, The Francis Crick Institute), 中込 滋樹 (アイルランド・Trinity College Dublin・School of Medicine), Neil Hanchard (アメリカ・Baylor College of Medicine・Department of

Molecular and Human Genetics), Gary Churchill (アメリカ・The Jackson Laboratory), Charles Lee (アメリカ・The Jackson Laboratory for Genomic Medicine, 中国・The First Affiliated Hospital of Xi'an Jiaotong University・Precision Medicine Center), G. Ekin Atilla-Gokcumen (アメリカ・University at Buffalo・Department of Chemistry), Xiuqian Mu (アメリカ・University at Buffalo・Jacobs School of Medicine and Biological Sciences), Omer Gokcumen (アメリカ・University at Buffalo・Department of Biological Sciences)

・ DOI: 10.1126/sciadv.abi4476

【詳細はこちら】

<https://www.soken.ac.jp/news/7215/>



2021.12.23

## 魚の骨から復元する過去の漁撈活動と気候変動

蔦谷匠<sup>1,2</sup>, 高橋鵬成<sup>3</sup>, 大森貴之<sup>4</sup>, 山崎孔平<sup>4</sup>, 佐藤孝雄<sup>5</sup>, 米田稷<sup>4,6</sup>, 加藤博文<sup>7</sup>, Andrzej W Weber<sup>8,9,10</sup>

<sup>1</sup>総合研究大学院大学, <sup>2</sup>海洋研究開発機構生物地球化学センター, <sup>3</sup>礼文町教育委員会, <sup>4</sup>東京大学, <sup>5</sup>慶應義塾大学, <sup>6</sup>University of Oxford, <sup>7</sup>北海道大学, <sup>8</sup>University of Alberta, <sup>9</sup>Aix-Marseille Université, <sup>10</sup>Irkutsk State University



「花の浮島」として有名な礼文島の風景

### 【研究概要】

遺跡から出土する魚骨は、過去の海に生きていた魚が漁獲されて埋没したものであるため、当時の海洋環境とヒトの食物獲得行動の実態を記録しています。また、安定同位体分析という手法を用いることで、遺跡から出土した魚が過去にどのような環境に暮らし何を食べていたかを推定できます。

本研究では、礼文島（北海道）の浜中2遺跡から出土した約2300～800年前の魚骨240点以上を安定同位体分析し、過去の礼文島に暮らした人びとの漁撈（ぎょろう）活動と海洋環境の時期変化を復元しました。その結果、タラ、ホッケ、ニシン、ソイなどの出土量が多く重要な食資源であった魚のうち、タラでのみ、古い時期（縄文文化期）に比べ

て新しい時期（オホーツク文化期）に窒素の安定同位体比が明確に低下していました。タラでは窒素の安定同位体比と体サイズが正の相関を示すため、オホーツク文化期に漁獲されていた個体のサイズが比較的小さかったことが示唆されました。オホーツク文化期には舟や大きな錘付きの網などの漁具が発達したことが考古学的な証拠からわかっており、比較的小さなタラでも効果的に漁獲できるようになった可能性があります。あるいは、これらふたつの時期のあいだには気候が寒冷化したことが花粉分析の結果から示されており、寒冷化によって礼文島周辺のタラの成長、移動、繁殖パターンが変化した可能性も考えられます。

このように、遺跡から出土したさまざまな魚種の安定同位体比を通時的に比較することで、過去の間行動の変化や気候変動の影響の痕跡を探ることが可能になります。

#### 【論文情報】

- ・ 掲載誌：Quaternary International
- ・ 論文タイトル：Sex-specific phenotypic effects and evolutionary history of an ancient polymorphic deletion of the human growth hormone receptor

- ・ 蔦谷匠（総合研究大学院大学・先導科学研究科・助教、海洋研究開発機構・生物地球化学センター・外来研究員）、高橋鵬成（礼文町教育委員会 学芸員）、大森貴之（東京大学 総合研究博物館 特任研究員）、山崎孔平（東京大学 総合研究博物館 学術支援専門職員）、佐藤孝雄（慶應義塾大学 文学部 教授）、米田穰（東京大学 総合研究博物館 教授）、Rick J Schulting（英国 University of Oxford, School of Archaeology 教授）、加藤博文（北海道大学 アイヌ・先住民研究センター 教授）、Andrzej W Weber（カナダ University of Alberta, Department of Anthropology 教授）、フランス Aix-Marseille Université, Laboratoire Méditerranéen de Préhistoire Europe Afrique、ロシア Irkutsk State University, Department of History
- ・ DOI: 10.1016/j.quaint.2021.12.005

#### 【詳細はこちら】

<https://www.soken.ac.jp/news/7218/>

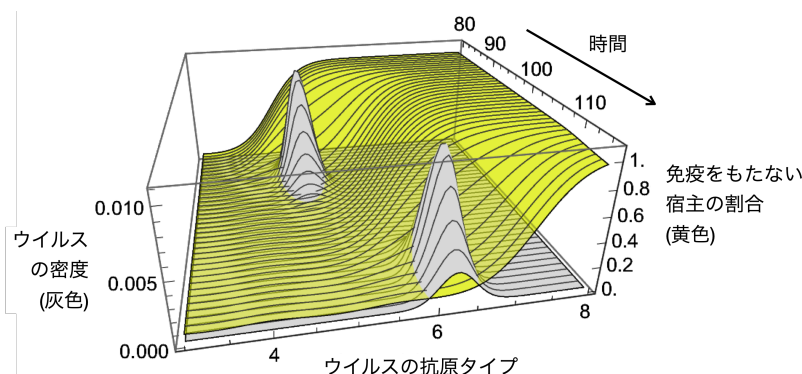


2022.1.17

## 免疫やワクチンからの逃避を繰り返す病原体は高い病原性を進化させる

佐々木 顕<sup>1</sup>, Sébastien Lion<sup>2</sup>, Mike Boots<sup>3</sup>

<sup>1</sup>総合研究大学院大学・先導科学研究科, <sup>2</sup>CEFE, CNRS, Univ Montpellier, EPHE, IRD, Montpellier, France, <sup>3</sup>Integrative Biology, University of California, Berkeley, CA, USA



病原体が特異的免疫系から逃げ続ける進化のダイナミクスのシミュレーション  
ある抗原タイプによる爆発的な流行の後、ウイルスは宿主免疫の幅をもった警戒網（交差免疫）に捉えられ、進化が停滞する。十分時間がたち、警戒網の幅を超えるだけの変異が蓄積すると次の大流行が起き、ふたたび進化が停滞する。

### 【研究概要】

伝染病を引き起こす病原体は、急速に巧妙に進化する能力に長けたウイルスや細菌や原生生物などの微小生物たちであり、人間によるこれら病原体への対策が、病原体の対抗進化を引き起こして、より強大な敵として育ててしまうことすらあります。このような「始末の悪い」病原体、つまり生物が長い進化によって生み出した対病原体の最終兵器とも言える免疫機構をかいくぐり、また最新の科学技術が生み出すワクチンや抗ウイルス剤などをかいくぐる、A型インフルエンザウイルスや新型コロナウイルスなどの病原体に焦点をあて、その感染力や病原性の進化を数理モデルで解析しました。理論解析の結果、免疫やワクチンからの逃避を繰り返す病原体では、感染宿主をより激しく搾取し、疾病を重篤化させる方向への進化が起きやすいこと、つまりより強

毒化する一般的傾向があることが明らかになりました。

### 【論文情報】

- ・ 掲載誌：Nature Ecology and Evolution
- ・ 論文タイトル：Antigenic escape selects for the evolution of higher pathogen transmission and virulence
- ・ DOI: 10.1038/s41559-021-01603-z

### 【詳細はこちら】

<https://www.soken.ac.jp/news/7238/>



## 研究助成学生の研究紹介

SOKENDAI 研究派遣プログラム、研究論文助成事業に採択された学生の研究概要を順次本学ホームページに紹介しています。

<https://www.soken.ac.jp/education/rintro/ri-grantedstd/>



### ■新規掲載情報

事業種別	専攻・氏名	タイトル
研究論文助成	遺伝学専攻 竹中伸巧郎	乳酸菌の糖資化性が菌同士の遺伝子交換による進化を促進する
研究論文助成	機能分子科学専攻 Palassery Ithikkal Jaseela	Lateral-tandem organic solar cells
研究論文助成	宇宙科学専攻 片野将太郎	宇宙用アレーアンテナへの新しい電力分布実装法
研究論文助成	情報学専攻 NGUYEN Hong Huy	Effects of Image Processing Operations on Adversarial Noise and Their Use in Detecting and Correcting Adversarial Images
研究論文助成	基礎生物学専攻 山本 啓	光で「脱力系」細胞を作り出す
研究論文助成	機能分子科学専攻(修了) Ji-Hyun Lee	有機太陽電池の理想的な性能の予測法～再結合発光の電場依存性測定～

# Media

---

## ■ 京都新聞 夕刊

【記事タイトル】現代のことば「進化するビーズ展」

【掲載】地域文化学専攻 齋藤玲子 准教授

【日時】2021年10月22日（金）

（参考）<https://www.kyoto-np.co.jp/search?fulltext=%E7%8F%BE%E4%BB%A3%E3%81%AE%E3%81%93%E3%81%A8%E3%81%B0>

## ■ 朝日新聞 朝刊

【記事タイトル】（進路わたし流）せっかく始めたなら続けて ※先生の研究内容等について

【掲載】比較文化学専攻 吉岡乾 准教授

【日時】2021年11月8日（月）

（参考）[https://www.asahi.com/articles/DA3S15103802.html?iref=pc\\_photo\\_gallery\\_breadcrumb](https://www.asahi.com/articles/DA3S15103802.html?iref=pc_photo_gallery_breadcrumb)

## ■ 朝日新聞 Globe

【記事タイトル】食と私たち「動物考古学にみる、肉食と私たち」

【掲載】生命共生体進化学専攻 本郷一美 准教授

【日時】2021年11月18日（木）

（参考）<https://globe.asahi.com/article/14483322>

## ■ 朝日小学生新聞、読売新聞 夕刊、東京新聞 夕刊、日本経済新聞 Fielder vol.61 サクラムック 18 他 海外メディア等

【記事タイトル】ニホンオオカミがイヌの単系統群に最も近縁

【掲載】生命共生体進化学専攻 寺井洋平 助教

【日時】朝日小学生新聞：2021年11月25日（木）

読売新聞 夕刊、オンライン：2021年11月27日（土）

（参考）<https://www.yomiuri.co.jp/science/20211127-OYT1T50132/>

東京新聞 夕刊：2022年1月8日（土）

日本経済新聞：2022年1月11日（火）

（参考）<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO79092340R10C22A1CE0000/>

Fielder vol.61 サクラムック 18：2022年2月1日（火）発売

（参考）<http://fielder.jp/>

[その他海外メディア等]

「Science」<https://bit.ly/3tXJt5w>

「NATURE 21 October 2021」<https://www.nature.com/articles/d41586-021-02890-z>

「New Scientist, 19 Oct 2021」<https://bit.ly/3KGreHx>

「True Viral News, 19 Oct 2021」<https://bit.ly/3H1vDme>

「Express Informer, 20 Oct 2021」<https://bit.ly/3IAw1s9>

「The Japan Times, 21 Oct 2021」<https://bit.ly/3H1HjFk>

「Phys.org, 21 Oct 2021」<https://phys.org/news/2021-10-dna-japanese-wolf-closest-relative.html>

「Smithsonian Magazine, 21 Oct 2021」<https://bit.ly/3tUwEJ5>

「Yahoo! News, 26 Oct 2021」<https://bit.ly/3fSpOeX>

## ■ 奈良新聞 朝刊、京都新聞 朝刊

【記事タイトル】井筒智彦の宇宙人って、いるの!?にて、宇宙人と出会ったら、会話できるのか

【掲載】比較文化学専攻 吉岡乾 准教授

【日時】奈良新聞 朝刊 2021年11月27日（土）、京都新聞 朝刊 2021年12月12日（日）

## ■ ヤフーニュース

【記事タイトル】『ゴールデンカムイ』をアクセサリから読み解くと「人類の縮図」が見えてきた

【掲載】地域文化学専攻 池谷和信 教授

【日時】2021年12月1日（水）

（参考）<https://news.yahoo.co.jp/byline/maishilo/20211201-00270343>

## ■ 朝日放送ラジオ「おはようパーソナリティ道上洋三です」

【記事タイトル】ニホンオオカミがイヌの単系統群に最も近縁

【掲載】生命共生体進化学専攻 寺井洋平 助教

【日時】2021年12月6日（月）

## ■ ファイナンス 12月号

【記事タイトル】ポストコロナの日本社会—文明の転換点における未来への視座—

【掲載】比較文化学専攻 吉田憲司 教授

【日時】2021年12月15日（水）

## ■ 読売新聞 夕刊

【記事タイトル】海外調査ストップ 懸念

【掲載】比較文化学専攻 吉田憲司 教授

【日時】2021年12月16日（木）

## ■ 日本経済新聞

【記事タイトル】特別展「ユニバーサル・ミュージアム」について

【掲載】比較文化学専攻 廣瀬浩二郎 准教授

【日時】2021年12月19日（日）

## ■ 京都新聞 夕刊

【記事タイトル】現代のことば「武州・上州ことばと養蚕」

【掲載】比較文化学専攻 齋藤玲子 准教授

【日時】2021年12月24日（金）

（参考）<https://www.kyoto-np.co.jp/search?fulltext=%E7%8F%BE%E4%BB%A3%E3%81%AE%E3%81%93%E3%81%A8%E3%81%B0>

## ■ NHK World JAPAN

【記事タイトル】Digging Deep: What Makes Shiba Inu Dogs So Special?

【掲載】生命共生体進化学専攻 寺井洋平 助教

【日時】2022年1月8日（土） 9:10、15:10、21:10、翌 3:10（日本時間）（見逃し配信1年間）

（参考）<https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/special/episode/202201080910/>



# Event Calendar

日程	イベント名称	実施専攻・基盤機関
2022/2/2 -2/4	SOKENDAI Asian Winter School (SAWS) 2022 <a href="https://guas-astronomy.jp/eng/Applicants/winter2022.html">https://guas-astronomy.jp/eng/Applicants/winter2022.html</a>	天文学専攻
2022/2/16	大学院見学会 ※オンライン <a href="https://www.nig.ac.jp/nig-kengakukai/nig-kengakukai2021/">https://www.nig.ac.jp/nig-kengakukai/nig-kengakukai2021/</a>	国立遺伝学研究所
2022/2/25	2022 年度核融合科学専攻で学ぼう！研究最前線 説明会・講演会 <a href="https://soken.nifs.ac.jp/archives/admissions_info/admissions_info-6855-2l">https://soken.nifs.ac.jp/archives/admissions_info/admissions_info-6855-2l</a>	核融合科学専攻
2022/3/7 -3/10	2021 年度 第 12 回総研大・国立天文台スプリングスクール (春の体験入学) <a href="https://guas-astronomy.jp/springs.html">https://guas-astronomy.jp/springs.html</a>	天文学専攻
2022/3/10 -6/7	企画展「焼畑——佐々木高明の見た五木村、そして世界へ」 <a href="https://www.minpaku.ac.jp/ailec_event/23187">https://www.minpaku.ac.jp/ailec_event/23187</a>	国立民族学博物館
2022/3/17 -5/31	日本・モンゴル外交関係樹立 50 周年記念特別展 「邂逅する写真たち——モンゴルの 100 年前と今」 <a href="https://www.minpaku.ac.jp/ailec_event/26554">https://www.minpaku.ac.jp/ailec_event/26554</a>	国立民族学博物館
2022/3/25	公開講演会「イメージの脈動にふれる」	国立民族学博物館
2022/3/25	大学院説明会 <a href="https://www.nibb.ac.jp/graduate/">https://www.nibb.ac.jp/graduate/</a>	基礎生物学研究所
2022/3/25	特別講義（多田蔵人准教授） <a href="https://www.nijl.ac.jp/activity/education/soken/lecture.html">https://www.nijl.ac.jp/activity/education/soken/lecture.html</a>	日本文学研究専攻
2022/3/25 迄	総研大 体験入学（2021 年度）	分子科学研究所

※原則として、総研大専攻としての行事のみを掲載します。

# お知らせ

## ■第63次南極地域観測隊（越冬隊）の隊員からメッセージ（2022/1/17）

レポート作成：馬場 健太郎（事務局職員、庶務・情報発信）

掲載協力：国立極地研究所

ニューズレターをご覧の皆さま、明けましておめでとうございます。第63次南極地域観測隊に参加している事務局職員の馬場です。昨年（2021年）12月16日に昭和基地に到着してから約1か月が過ぎました。今回は昭和基地到着前後の様子についてご紹介します。

63次隊を乗せた「しらせ」は、低気圧を避けながら南下していましたが、12月上旬、暴風圏に突入しました。暴風圏では船体が大きく動揺し、廊下を真っすぐ歩くことも困難になるほどでした。しかし、暴風圏を抜けると一転して海面は穏やかになり、時折ペンギンやアザラシの姿も見られるようになりました。

周囲の流氷が増えてくると、見える世界は段々と白くなり、南極に近づいていることを実感します。

12月10日朝に「しらせ」はリュツォ・ホルム湾の定着氷縁に到達しました。連続砕氷で進むことができた流氷域とは異なり、100mほど後ろに下が

り、勢いをつけて氷の上に乗上げ、船の重みで氷を割る「ラミング」と呼ばれる方法で前進します。氷が厚いところでは、なかなか先に進むことができず、ペンギンに追い抜かされることもありました。ちなみに、往路のラミング回数は610回でした。

12月14日にはヘリコプターの試験飛行と氷状偵察フライトが行われ、いよいよ昭和基地に入る日が近づいてきました。



「しらせ」のすぐ近くまで寄ってきたアデリーペンギン  
(12月9日)

そして、12月16日、牛尾隊長を乗せたヘリコプター第1便に私も搭乗し、62次越冬隊の待つ昭和基地のヘリポートに降り立ちました。

11月10日に横須賀を出港して以来、陸地を踏むのは約1か月ぶりでしたが、感慨に浸る間もなく、62次隊の食

糧や、夏期間中の初期に必要な観測・設営機材をヘリコプターで輸送する優先物資空輸が始まりました。越冬隊の庶務隊員は、翌年には昭和基地へ持ち込まれる物資の荷受けを担当することになるため、私は昭和基地到着後そのままヘリポートに残り、引継ぎを兼ねて荷受け作業に従事しました。

(優先物資空輸や氷上輸送などの様子は、極地研の観測隊ブログ(<https://nipr-blog.nipr.ac.jp/jare/20220113post-202.html>)に記事が掲載されていますので、ぜひご覧ください。)

優先物資空輸が終了した12月19日、「しらせ」は砕氷航行を再開し、昭和基地から約350mの距離に接岸しました。接岸といっても昭和基地に岸壁はないため、基地のタンクからホースを展張して燃料をホースで輸送できる約1km以内の距離に到達し、停泊することを接岸と呼んでいます。接岸後すぐにホースを接続できるように待機しながら「しらせ」の接岸を見守りました。

ヘリコプターによる輸送は、昭和基地への物資輸送のほかにも、昭和基地から離れた野外での観測を支援するためのフライトが組まれます。私も氷上輸送の合間を縫って、12月24日には着陸地点の調査を行うフライトに搭乗させていただきました。

また、手空きの日には古くなった建物の解体工事や、新しく作られる建物の基礎を作る工事に参加しました。夏期間中の昭和基地は、しばしば工事現場



昭和基地のヘリポートで出迎えてくれた62次隊の皆さん。  
(12月16日)

のようだとおっしゃいますが、まさに工事現場そのものです。到着まで段々と白い世界に馴染んできたのに、夏期間の昭和基地は雪解けが進んで茶色い世界が広がっており、なんだか不思議な感覚です。

昭和基地の夏期間は怒涛のように過ぎていきます。

全文はこちら：<https://www.soken.ac.jp/news/7254/index.html>



## ■ 編集後記

新しい年を迎えて早々、全国的な強い寒気により猛吹雪に見舞われた葉山キャンパスも4年ぶりに雪で覆われましたが、一転翌日には雲一つない晴天となり雪化粧したキャンパスと富士山のコラボが実現しました。（表紙写真）



降雪の総研大



林を出て事務所を見つめる  
タヌキ

また、雪の残るキャンパスにタヌキが現れました。突然の雪に驚いたタヌキが食料を求めて森林の中から出てきたのでしょうか。総合企画課の事務所窓の外で2時間ほどこちらの様子を見ていましたが林の中に帰って行きました。

今シーズンは例年以上の寒さを感じる冬となっています。未だ終息しないコロナウイルス感染症も不安ではありますが、健康にご留意いただき幸多き一年になりますようお願い申し上げます。

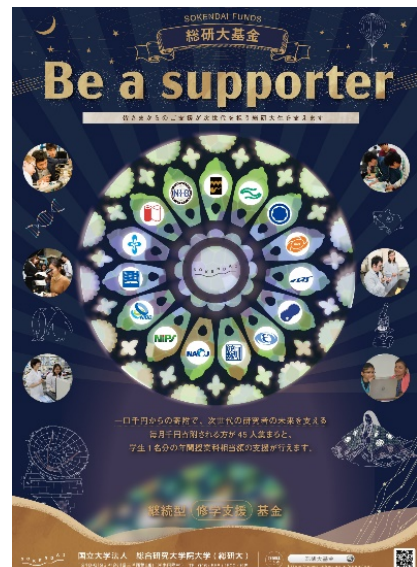
（広報社会連携係 T.S.）

## 総研大基金によるご支援について

令和2年度4月、本学は戦略的な運営を支える財政基盤を強化すべく、総研大基金を創設しました。この基金を活用して、国際交流の支援、学生支援等を推進して参ります。ぜひ皆様のご支援をお願いいたします。

【詳細はこちら】

<https://www.soken.ac.jp/donation/>



広報社会連携係では、メディアを通じて総研大の研究成果を広く社会に発信しています。特に、総研大在学生在が筆頭著者として研究論文を出版する際、プレスリリースを行う場合は、総研大と所属専攻(基盤機関)との共同プレスリリースを行っておりますので、是非総研大広報社会連携係までご連絡ください。

各専攻の学生・担当教員の「メディア出演」、「受賞・表彰」および「地域社会と連携・密着したアウトリーチ活動等の社会連携・貢献活動」についてニュースレター、ウェブ掲載等により発信しておりますので、各種情報を是非お寄せください。

研究論文を投稿する場合や、メディア等に出演される場合は、「総合研究大学院大学」と表記いただきますよう、総研大の知名度向上にご協力をお願いいたします。

2022年2月発行

編集・発行

国立大学法人 総合研究大学院大学

総合企画課広報社会連携係

神奈川県三浦郡葉山町(湘南国際村)

TEL 046-858-1629

FAX 046-858-1648

Email kouhou1(at)ml.soken.ac.jp

※(at)は@に変換してください。

©2022 SOKENDAI